

戦争という憑依現象

トーマス・マンの見たもの



戦争は言葉で作る 2

Grasshouse

「群系」30号掲載 (2012年12月)

先日、尖閣・竹島問題でテレビや新聞メディアが騒いでいる中で、「政治と文学」という、古くて新しい問題を思い出した。戦後文学ではお馴染みのテーマであるが、大衆消費社会、情報化社会、ポスト・モダンなどと浮かれているうちに、いつのまにか文学からも自然消滅してしまった主題である。

――海の向こうの中国が、あるいは日本ぜんたいが、猛烈に殺気立ってくるなか、奇妙に懐かしいものに感じたのは、トーマス・マンの『ドイツとドイツ人』という講演集であった。尖閣諸島に船が三千隻向かっているという、アナウンサーの緊張した声を聞きながら、放ったらかしにしていた文庫本を手にとってみた。いい加減なページで目を走らせていると、いつしか止まらなくなってしまった。

そこには疲労の色濃いトーマス・マンが演壇に立っていて、ぴっしりと背筋を伸ばして、とうとうと語っていた。厳めしく目を光らせ、ゲーテを引用しつつ、こめかみに太い筋を張らせながら……。

収録の『理性に訴える』は、一九三〇年の講演で、まさにナチス台頭の時期である。

「周囲はすべて軍備を備え、しかも武器の輝きを誇っている国ばかりの真只中であって、ひとりドイツのみが武器を持たず、その結果、ポズナンのポーランド人、ヴェンツェル広場のチェコ人のように、誰でも何のはばかりとところもなくドイツに当たり散らすことのできるような状態」という時代である。

「これがドイツ的でしょうか。狂信が、めったやたらに手足を振り回すような無思慮が、理性と人間の品位と精神的自制を忘我的熱狂のうちに否定するような態度が、ドイツ人の心の深層のどこかに本当に根づいたことなのでしょうか」

マンは、早くも台頭してきた国家社会主義者・ナチスの背景に潜む魔に気づいており、それが根底においては、ドイツ・ロマン派のデモニッシュな暗闇から、その血液と滋養分を吸い上げている地霊の化け物であることを、見抜いている。

一九四五年の五月末、第二次大戦終了前後の米国ワシントン国立図書館での講演『ドイツとドイツ人』においては、「いまや汚辱にまみれ息絶えつつあるナチズム」という、複雑な感慨の込められた言葉が吐かれることになる。ナチス・ドイツ降伏は、五月八日。「めったやたらに手足を振り回す」ヒトラー総統は、四月三十日に自殺。数ヶ月前に亡命し、すでにアメリカ市民となっているトーマス・マンは、この時七〇歳になっていた。

この講演録では、彼が少年時より親しみ、魂の故郷としてきたドイツ・ロマン派の「幻想的で妖気を漂わせたもの、深遠で風変わりなもの、それにまた高度な芸術的洗練」について語ることが、そのままナチズムについて語るようになってしまう。「生命力の賛美であると同時に、死への親近性でもある」ロマン主義について語るとき、マンの口調は、明らかに魅了されている。

ゲルマン神話、ワーグナー音楽、ニーチェの哲学——もっとも内的な詩として、私的に偏愛してきた世界が、政治的に奇形化され、通俗化され、病的に肥大したとき、自己破壊的な集合意識として、万人に猛威をふるい、憑依現象と化して、一国を荒廃せしめたのである。

『理性に訴える』と『ドイツとドイツ人』の二つの講演録は、ナチス・ヒットラーの台頭から、終焉にいたる十五年の時間を俯瞰している。その政治的口マン主義の「内面」を、『魔の山』『ファウスト博士』の作家が、ドイツの文学・芸術・哲学とないまぜにして、批評的に語った記録となっている。

このようなトーマス・マンの洞察は、日本の精神史においては、容易に「日本浪漫派」を連想させる。国民が生きるのに必要な、実用的シールドとしての国家概念が、神話や集合意識や地霊と結びつくとき、国家イメージが天空を覆う壮大な実体化が展開されるのだ。

つまり「文学」が、「政治」に化ける。これは一種の集団憑依現象に似ている。

それは初期においては確かに詩であったものが、いつのまにか政治へと転化し、内外への凶暴な抑圧力を持つ巨大な幻想体として、働き始める。この怪物は、その成長過程において巧妙なプロバガンダを雷光のように発生し続けるだろう。生を豊かにしつつも、時に狂気へと導く「幻想」と、共同体の生存のための「インフラストラクチャー」とを、わけて考えなければならない。われわれは、同一の国家概念として、胎盤のように癒着している「シールド」と「神話」との二層を、たえず慎重に〈腑分け〉しなければならない。その腑分け作業の際には、すでに懺くさい過去の書物だと思われている吉本隆明の『共同幻想論』のコンセプトは役に立つだろう。そしてトーマス・マンのイロニーの視線が必須となる。同時代の空気に、密着せず、また離れもせず、という意図的に宙吊りのスタンスである。

先日の尖閣問題の情報洪水の中で、そのような批評の機能について、息苦しくも切迫感めいたものを感じざるをえなかった。

なにゆえに筆者は、しばらく開いてもいなかったマンの作品などを手にとったのだろう。おそらく、マンの中には、西欧的な「中庸」の精神と、平衡感覚があると思ったからであり、憑依状態を解毒する霊薬が潜んでいると、うすうす期待したからに相違ない。

暗いもの、狂熱的なもの、民族の血と、地下の霊から養分を吸い上げつつ、ワーグナーの無限旋律のように渦を巻いて迫り上がってくるもの、それらは生命に必須のものである。しかしそのリビドーはときには暴走し、自己破壊へと誘う、魔的なディオニソスの力である。その混沌の奔流を横目にしつつも、イロニーの精神を失わない態度——そんなものをトーマス・マンの中に確かめたかったのに違いない。

今回の日中間の混乱のさなかに発せられた村上春樹の朝日新聞の寄稿、いささか八方美人的な「中庸」のメッセージよりも、もっと奥にある「文学の声」が確認したかったのである。そのもっと奥にあるはずの「中庸」とは、両極に向かう極端なエネルギーが、中心で均衡を保って、とりあえずの静止状態を演じているような緊迫したものであり、知的冷徹さと体温とが融合した人文主義者マン、そしてこの巨匠の創造による登場人物セテムブリーニの視線である。

二〇世紀前半のマンの講演が、今日読んでもなお、多くの示唆を含んでいるのは、社会現象や戦争の狂気を語っていながら、それがそのまま人間存在や、精神そのものの淵源について語られているからである。すなわち、マンの同時代批評は、文学作品の延長であり、決して、とってつけたような政治論ではない。彼の講演録の随所に、『魔の山』の人文主義者セテムブリーニや、ナフタ教授の言葉が、綺羅星のように、ちりばめられている。その文明批評、時代批評は、作家の自己批評を基軸として、見事な相似形を描いている。われわれはそこに、小説のように「感情移入」することが可能であり、なおかつ、己を写す「鏡」を見ることになる。

こういったことは、イロニーというものが、ひとつの思想にまで高められているマンの文学の性格と、無縁ではない。

たとえばマンに『マリオと魔術師』という短編がある。イタリアを旅行したドイツ人家族がたまたま訪れた見世物小屋で、いかがわしい魔術師の力によって観客が異様な空気に包まれていく情景を描いている作品である。ここにファシズムのグロテスクな「魔術」に対する批評とイロニーが込められていることはいうまでもない。

イロニーとは、通常は、皮肉や風刺といった「表現の薬味」であろうが、マンにおいては、世界と対峙する実存のスタンスそのものである。共感するようで反撥し、愛撫するようで風刺する。この微妙な両義性を持つ「批評的な愛」とは、まさしく小説家・文学者の立場であろう。必死な、せっぱ詰まった、生真面目な小説の多い日本文学の中では、こういったイロニー、あるいはフモールを、文体や創作態度にまで鍛えた作家は、少ないように思う。この体質は、しかし、見方によっては危険なことである。

むろん、イロニーには限界がある。それは視線であり、語り口であり、世界への距離感であり、せいぜいのところ、世界をよりよいものに変革しようと望むお喋りに過ぎない。

その限界は、『魔の山』において、スイスのサナトリウムでの高踏的な芸術論や、形而上学の宴を終えて、主人公ハンス・カストルプが、下界へと降りてゆかねばならなくなる荒涼としたラストシーンに暗示されている。下界とはつまり、第一次大戦の火煙と塹壕の戦場へ、ということである。

われわれは小説空間の外側に、読者あるいは作者として、身体を持っている。ハンス・カストルプが、名残惜しいベルクホーフの療養所を去ったように、いずれは物語の時間を降りてゆかねばならない。そしてわれわれの肉体は、壊れやすく、攻撃されやすい。

確かに「イロニー」とは、悲しいかな、一種のサロンの贅沢品に過ぎない。しかし、こうした文学と批評による「知恵の鏡」「象徴の鏡」を無用のものとして捨て去るならば、人々はいずれ再び、濃霧に包まれ、ごうごうと音を響かせる無明の滝の向こう側へと、われ先に堕ちて行くことになるだろう。

文学とは余計者の手鏡に過ぎないのだろうか。もしそうだとすれば、喧噪と情報操作に満ちたメディアや、龐大なる娯楽作品の自然淘汰の中で、滅びてゆくしかない。

しかしここで、トーマス・マンが何度も引用している巨大な先行者ゲータについて思い出すのも、まんざら意味のないことではない。自分自身を、ラジカルで斬新で独特な存在だと思っている

すべての若者が大嫌いな、あのゲーター—いや、ほとんど今日では忘れられてしまった過去の賢者としてのゲエテである。

なぜなら、人間は皆、小さな、小さなファウストであり、しかもメフィストフェレスという影の道連れを随行したミニ・ファウストだからである。悪魔とは親密に、慎重につき合わなければならない。悪魔メフィストが硫黄の匂いの中で出現した時、お前は何者かと問われ、「私は常に、悪を成さんと欲して、結果的には善を成してしまう、あの宇宙の諸力の一部です」と答えた。

人間は結局のところ、自分で自分を魔法にかけているのであり、内なるメフィストによって縛りつけられた魔法の縄から、自分で自分を、解き放たなければならない。知恵の輪を解くように。そしてメフィストフェレスもまた、〈深層の自己〉であるに違いない。われわれはまさに、自己破壊衝動によって、この生の深部を学ぶのである。

時代のメフィストフェレスの顔が描かれたとき、「文学」は単なる余計者の手鏡ではなく、社会にとって、人類ぜんたいにとって必要な、魔法を霧散させる反射鏡となるはずだ。

人間はいま、世界史の時間の流れの中で、どのような位置に漂っているのだろうか。

ごうごうと白い霧を噴きあげる大滝に向かう小舟は、滝壺に吸い込まれる手前までが勝負である。

〈了〉

戦争は言葉で作る 1

「批評・啓蒙・プロパガンダ

黒岩涙香と萬朝報の時代」

<http://p.booklog.jp/book/76133/read>